

08-28-西体-16

幼児の浮き趾の実態

—性差および年齢差—

○松田繁樹（岐阜聖徳学園大学）、出村慎一（金沢大学）、村瀬智彦（愛知大学）、
宮口和義（石川県立大学）、春日晃章（岐阜大学）、青木宏樹（金沢美術工芸大学）

本研究の目的は、3歳から6歳までの幼児579名（男児296名、女児283名）を対象に、浮き趾を有する者（以下、浮き趾者）の割合の性差および年齢差を明らかにすることであった。足蹠投影機を利用し、被験者の接地足蹠面の画像を一人5回撮影した。撮影した5画像のうち4画像以上が「完全に接地していない」もしくは「わずかな接地しかみられない」状態の趾を浮き趾とした。浮き趾者の割合は、男児（3～6歳）では左足57.8%、右足59.1%、女児（3～6歳）では左足53.0%、右足55.5%であった。両足のうちどちらかに浮き趾のあるものは、男児73.0%、女児69.3%であった。幼児期全体（3～6歳）に浮き趾者が多数いることが明らかにされた。浮き趾は全年齢、男女とも第5趾、第4趾、第2趾、第3趾の順に多かった。浮き趾者の割合に性差および年齢差はなかった。

08-28-西体-17

定位反応の消去速度と睡眠時間、疲労自覚症状、不安感情との関係：大学生を対象として

○金子 慧（日本体育大学大学院）、野井真吾（埼玉大学）、
小林幸次（埼玉大学大学院）、西條修光（日本体育大学）

本研究では、健康な大学生7名を対象とし、聴覚刺激による定位反応の喚起および消去の過程を観察し、その実態を明らかにするとともに、睡眠時間、疲労自覚症状、不安感情との関係を明らかにすることを目的とした。

その結果、われわれによる先行研究の結果と異なり、睡眠時間と定位反応の消去速度との間に特筆すべき関係は確認できなかった。これには、1名を除く6名の対象者の睡眠時間が6時間半～7時間半の範囲にまとまっていたことが影響しているものと推察された。また、疲労自覚症状と定位反応の消去速度との関係についても明確な関係性は確認されなかった。この点については、先の先行研究の結果と同じ傾向であった。一方、不安要素と定位反応の消去速度との関係については、不安感情が高い者ほど定位反応の消去速度が遅い傾向にある様子が示された。

08-28-西体-18

椅子立ち上がり動作時における体重心移動速度の性差および年代差

○山田孝禎（福井工業高等専門学校）、出村慎一（金沢大学）、長澤吉則（京都薬科大学）、
中田征克（防衛大学校）、内山応信（秋田県立大学）

本研究の目的は、高齢者のSTS動作時における体重心移動速度の性差および年代差を明らかにすることであった。健康な高齢者71名（男性30名；年齢：70.0 \pm 6.7歳、女性41名；年齢：70.7 \pm 6.7歳）および若年者30名（男性15名；年齢：20.7 \pm 5.0歳、女性15名；年齢：20.0 \pm 3.5歳）が、等尺性膝関節伸展筋力を測定した後、膝関節の高さに設定された椅子から素早く立ち上がる際の体重心移動速度を測定した。体重心移動最大および平均速度を算出した。有意な主効果は、両速度変数と伸展筋力の年代、最大速度と伸展筋力の性に認められた。性の効果は、いずれも中程度であったが（最大速度： η^2 p2=.12、伸展筋力： η^2 p2=.25）、年代のそれは、最大および平均速度で大きく（ η^2 p2=.47と.48）、伸展筋力で中程度であった（ η^2 p2=.26）。以上から、本研究の方法による体重心移動速度は、筋力測定による高齢者の機能評価よりも、加齢に伴う機能低下を反映しうる変数と示唆された。